



第109号

北海道ポーランド文化協会誌「ポーレ」
2023.5.1

第1558回 札幌市民劇場



2023. **6/3** (土)

開場 18:00

開演 18:30

札幌コンサートホール
Kitara 小ホール

北海道ポーランド文化協会 *Hokkaido-Poland Cultural Association*
創立35周年 *35th Anniversary Concert*
Chopin & Poland **記念演奏会**



北海道ポーランド文化協会創立35周年の節目に、ポーランドの作曲家たちの作品を取り上げます。

演奏は、日々ポーランド人作曲家の作品を研究し、道内外で活躍している、会員である演奏家たちです。

第1部は、ショパンの名曲を集めたオールショパンプログラムです。

第2部は、お話「近年のショパン・ブーム」に続いて、声楽やヴァイオリン、2台のピアノや連弾など、さまざまなアンサンブルを通して、素朴で美しいポーランド音楽を心ゆくまで味わっていただけたら幸いです。

皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

- ◆出演者 (ピアノ) 徳田貴子、本田真紀子、田口綾子、西村範子、中島幸治、坂田朋優、鈴木飛鳥、水田香、北浦由花里
- (ヴァイオリン) 徳田和可、(声楽) 高橋可奈子、松井亜樹
- (ピアノ伴奏) 安藤むつみ、畑端梓、高橋健一郎
- (お話) 三浦洋(北海道情報大学教授)=右写真=



ショパン

- ◆曲目 (ピアノ) ショパン 華麗なる大円舞曲 変ホ長調、エチュード ハ短調「革命」、「4つのマズルカ」より 第1番 ト短調・第2番 ハ長調・第4番 変ロ短調、バラード 第2番 ヘ長調、舟歌 嬰ヘ長調、前奏曲 変イ長調、ポロネーズ 変イ長調「英雄」、2台のピアノのためのロンド ハ長調
- モシュコフスキ ポロネーズ ロ短調、クラコヴィアクト長調
- (ヴァイオリン) ヴィエニャフスキ 華麗なるポロネーズ 第1番 ニ長調
- (声楽) カルウォーヴィチ「広い、広い海原を」、「失意」、「穏やかで明るい黄金の日々を」、「最初の星々輝く」、「一番美しい歌の数々」
- ショパン「願い」、「メロディ」



モシュコフスキ

入場料 2,000円 (全席自由、当日券同じ)

お問合せ・予約先：
hokkaidopolandca@gmail.com
011-556-8834 (安藤)



カルウォーヴィチ



ヴィエニャフスキ


 憧れのヴァイオリニスト ヴィエニャフスキ 徳田 和可
 

皆様、初めまして。新会員の徳田和可です。「徳」は、正しくは心の上に「一」が入る「徳」ですが、たまに表示・変換されなかつたりするので、どちらでも構いません。私自身もメールでは「徳」で打つこともあります。）

まずは、少し自己紹介をさせてください。



担当楽器はヴァイオリンで、4歳から習っています。同時にピアノも習っていて、小学生から高校生まで安藤むつみ先生に習っていました。ポーランド協会入会は、安藤先生に誘っていただいたことがきっかけです。札幌大谷大学の研究生を修了し、今は母校の藤女子中学・高等学校の音楽の非常勤講師、個人的にヴァイオリンの指導も行なっています。

記念演奏会ではヴィエニャフスキの「華麗なるポロネ

ーズ第一番」を演奏させていただきます。この曲について少し紹介させていただきます。

ヴィエニャフスキといえば、驚異的な技術をもつ名ヴァイオリニストということが浮かびます。それは、あの有名なパガニーニ並みと言われています。ヴィエニャフスキは、テクニックだけではなく、表現力も素晴らしかったと言われていて、ヴァイオリン弾きとしては大変憧れる作曲家・演奏家になります。ポーランドの風を感じながら精一杯演奏させていただきたいと思っています。

これからどうぞ宜しくお願い致します！（とくだ・わか）



 ポーランドの地に想いを馳せて 鈴木 飛鳥
 


この度、入会させていただいた鈴木飛鳥と申します。私は、ロシアのサンクトペテルブルクとモスクワに留学していましたが、いつかはポーランドの地を訪れてみたいと思いつつも、結局は実現することが出来なまま、帰国することになりました。

ピアノを弾く人にとって、ショパンは特別な作曲家であり、また、ショパンの祖国であるポーランドにも、憧れのような気持ちがあります。今回、こちらの協会に入会させて頂いたのを機に、ポーランドの文化に触れたいと思っています。そして、ショパン以外にも、以前からシマノフスキの作品などにも興味がありましたので、ぜひ取り組んでみたいと考えています。

6月にキラ小ホールで開催される創立35周年記念演奏会では、モシュコフスキ作曲の「ポーランド民族舞曲集 Op.55」から第3、4曲を連弾で演奏いたします。第3曲のポロネーズは、物悲しい旋律が印象的ですが、第4曲のクラコヴィアクは一転して、非常に軽快で楽しい作品になっています。

演奏会では、ポーランドの地に想いを馳せて、心を込めて弾きたいと思つています。ぜひ、皆さんにお聴き頂けたら嬉しいです。（すずき・あすか）



 憧れの英雄ポロネーズ 中島 幸治
 

この度、入会させていただきました中島幸治と申します。私はハンガリーへ留学しておりましたが、ポーランドのワルシャワへは、当時の留学仲間と一緒に一度だけ観光で行ったことがあります。

ワルシャワを訪れたのは約8年前になりますが、中でも印象に残っているのは、ショパンの心臓が眠る「聖十字架教会」を訪れ、ショパンの心臓が納められている柱の前で祈りをささげ、ショパンの祖国ポーランドへの思いを感じ胸が痛くなったことです。

市内の公園も散歩しましたが、ちょうど木枯らし舞う季節で北海道の景色と共通するところもあり

何だかホッとした記憶があります。

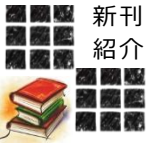
6月の記念演奏会では、ショパンのプレリュードと英雄ポロネーズの二曲を演奏させていただきます。英雄ポロネーズは、力強いリズムと優美なメロディーでショパンのポーランドへの愛国心が感じられる曲でとても大好きな曲です。

私が初めて英雄ポロネーズを聞いたのは「シャイン」という映画の中でした。あるピアニストの半生を描いた作品で、当時ピアノを習い始めた私にとってはとても衝撃的な映画でした。

憧れの英雄ポロネーズを初めてステージで演奏させていただけることに感謝しながら、聴いて下さる方の心に届くよう精一杯演奏させていただきます。

どうぞよろしくお願ひいたします。（なかじま・こうじ）





『ショパン〜プリンス・オブ・ザ・ロマンティクス』
 アダム・ザモイスキ (著) 大西直樹; 楠原祥子 (訳) 音楽之友社 2022.10

ショパンの人生や作品について日本語で書かれた本は、訳書も含めて百冊近くになると推察されますが、また新たな1冊が誕生しました。ポーランドの大貴族の家系を出自とするアダム・ザモイスキが2010年に刊行した英語版 *Chopin: Prince of the Romantics* の和訳です。ザモイスキは1979年にもショパンの伝記 *Chopin: a Biography* を著わしており、この新著は新たな資料をまじえた改訂版という位置づけになっています。

旧著と同様、一次資料に基づいて事実を年代順に追い、ショパンの人生を誕生から最期まで再現するような記述は克明で、極めて密度が高い内容です。簡単に読み流せる文章ではないものの、著者の力強い筆致に読者は引き込まれることでしょう。

つとめて客観性を保とうとする叙述のため、何らかの意味で評価に関わる事柄は慎重に述べられています。ショパン自身も交流のあったザモイスキ家の末裔であればこそ、誇張して語られがちな楽聖像からは距離を取り、真実を再現しようとしているのだと思われま。

エルスネルとクルピンスキ

目を引く内容としては、まず、ショパンにとって音楽上の師に当たるユゼフ・エルスネルとカロール・クルピンスキとの対立が挙げられます。ドイツ音楽を模範とする前者とイタリア音楽を崇敬する後者との間には考え方の違いがあり、その争いに若きショパンが巻き込まれていたことを筆者は初めて知りました。

それに劣らず衝撃を受けたのは、ショパンの親友として知られるユリアン・フォンタナが1842年5月、ポーランドにいる妹に宛ててパリから送った手紙の内容です。「僕は人生を開いてくれるはずの一人の友に頼ってきた。でも、その人はいつも不誠実で偽りだらけだった。彼の影響から離れたくてパリを去ることまでしてみたが、良いことは少しもなかった」という文面に実名はありませんが、内容からショパンを指していることは明らかです。筆者が知る限り、この手紙がこれまで日本語の活字になったことはありません。

もう一人、ショパンが頼っていた年上の友人アルベール・グジマワがロシアのデカブリスト(十二月党

員)とつながりを持ったため、ロシアで投獄された経験を持つことも、あまり知られていない事実ではないでしょうか。

シューマン、クララ、メンデルスゾーン

もちろん、明るい出来事も多数あります。1835年10月、一時婚約していたマリア・ヴォジンスカのいるドレスデンを訪れたショパンは、パリへの帰路、ライプツィヒに立ち寄り、ロベルト・シューマン、クララ・ヴィーク、フェリックス・メンデルスゾーンと対面しました。結婚を控えていたロベルトとクララに会わせようと、メンデルスゾーンがショパンの到着を待ち望んでいたという叙述からは、いかにもロマン派の音楽家たちらしい青春群像が浮かび上がってきます。

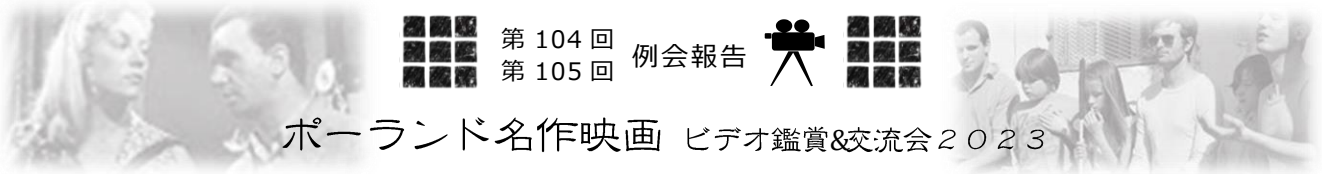
また、1836年10月パリのオテル・ド・フランスでショパン、ジョルジュ・サンド、フランツ・リストが一緒にひと時を過ごす場面も印象的です。女流作家サンドとショパンが出会った日にほかなりません。約9年間の生活をともにしたショパンとサンドの関係については、既に多くの評伝で語られているものの、ザモイスキの客観的な説明を読むと、ずいぶん印象が変わるように思います。

今世紀に刊行された訳書を顧みれば、2012年に春秋社から、音楽学者ジム・サムソンの研究書の和訳「ショパン 孤高の創造者〜人・作品・イメージ」(大久保賢訳、英語版: *Chopin*. Oxford UP, 1996)が出ています。この本は、どちらかといえばショパンの作品史を中心にした叙述になっていますので、ザモイスキの著作と併読することで最新のショパン像が立体的になることでしょう。(三浦洋)

(みうら・ひろし) 1960年北海道三笠市生まれ
 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了
 (博士(文学))、2009年より北海道情報大学教授
 日本ショパン協会北海道支部理事、本会会員



6月3日(土)の記念演奏会での三浦氏の「お話」は、「近年のショパン・ブーム」と題して、レヴェルの高かった2015年と2021年の国際ショパンコンクールにちなんだお話になります。



『エロイカ EROICA』 2/20

会員11名、一般12名が参加。ビデオ鑑賞会は毎回高齢の方が中心ですが、今回は20代の方も数名参加されました。

「英雄的行為」とは何か、『地下水道』とはまた違った視点で、ドイツ占領下のポーランド人の意識をシニカルに描いた作品でした。『パサジェルカ』でも感じたことですが、ムンクの人間洞察は深いです。

上映後の懇談会では、現在のウクライナ戦争に絡めた感想もありました。

アンケートでは「大変良かった」2名、「良かった」5名でした。

◆アンケートの感想より

- ・司会の池田さん=下写真=のリードがすばらしかった。皆さんからの意見発表を引き出して下さり大変良かった。映画を見てお互いに意見交換を楽しみたい。(77才、無職)
- ・「ワルシャワ蜂起」は言葉だけ知っていて詳細を知らなかったので勉強になりました。映画の描き方の立派な人間とはいえない部分やコミカルな部分に戸惑いがありました。他の方のお話を聞きながら改めて味わって考えをめぐらせてみたいと思いました。チャップリンの映画を思い出した。(53才、会社員)
- ・まったく予備知識が無く観たので映画の背景や伝えたいことが理解できず残念。今日をきっかけに興味を持って調べてみたいと思いました。(59才、アルバイト)
- ・ポーランドのロシアぎらいが良く判った。(72才、無職)



『イマジン IMAGINE』 3/13

会員11名、一般12名が参加(前回と顔ぶれは多少異なります)。懇談会では、リスボンの街並みは美しくぜひ一度行ってみたい、視覚障害がテーマで重い作品になりがちだが、ラブロマンスに仕上げたのが良かったなど、活発な感想をいただきました。

ラストシーンが非常に印象的な作品でしたが、映画研究者の坂尻昌平氏からこの作品のカメラワークについて鋭い指摘をいただきました——この映画でカメラはずっと近景しか映し出していない。それは視覚障害者の立場を反映した描写といえるが、最後のシーンで一気に遠景描写に切り替えたところに、イマジンすることで今まで見えていなかったものが見えてくることを表現するという制作者の意図がある——という趣旨だったと思います。

アンケートでは「大変良かった」5名、「良かった」3名でした。

◆アンケートの感想より

- ・ポルトガルは数年前、1週間ほど滞在した。リスボンはタイムストップした街で落ち着いた大好きな所であつた。(73才、無職)
- ・視覚障害者達の日常生活を見事に描いている。(73才、無職)
- ・イアンとエヴァの悲恋？イアンの想像はウソ？ホント？(74才、無職)
- ・一編の映画として面白いと思って見ていたが、それは何を描きたいのだろうか？意図が良く分からない。もう少しストーリーを追えば分かるだろうか？という興味だった。しかし、最後まで良く分からなかった。視覚障害者を描いているのだが、訴えたいのはそこだったのだろうか。良く見るとポーランド、ポルトガル、フランス、イギリスの合作とあるのだが、何故これらの合作なのか、その背景が良く分からなかった。そこが知りたいと思う。(66才、会社員)
- ・いつも、ポーランド映画をありがとうございます。知らない映画を今後も上映していただけると嬉しいです。(66才、バイオリン講師)
- ・見終わった直後は視覚障がいのある方々の映像に衝撃を受けて混乱し、次に皆さんの感想を聴かせていただいて新たな視点が得られ、さらに時間をおいてからじわじわと心が動かされました。(50代、会社員)

(報告:園部真幸、運営委員)

ポーランドの巨匠 イエジー・スコリモフスキ監督最新作 『EO イーオー』

旅するロバの物語、全世界が息を呑んだ、現代の寓話×無比の映像体験

第95回アカデミー賞 国際長編映画賞ノミネート

第75回カンヌ国際映画祭 審査員賞/作曲賞受賞

2022 | ポーランド/イタリア | 88分 | カラー

| ポーランド語/イタリア語/英語/フランス語

2023.5.5~ シアターキ
最終日はご確認ください (011-231-9355)



■ 報告 ■ 《特別講演会》ブロンスワフ・ピウスツキの遺したもの 2023. 3. 4

特別講演会「ブロンスワフ・ピウスツキの遺したもの」において、白老町・国立アイヌ民族博物館の佐々木史郎館長が「ブロンスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」、田村将人資料情報室長が「ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み」と題して講演しました。

参加者は70人超、情報豊富な講演のあと、エンチウ(樺太アイヌ)協会の田澤守会長や井上紘一北大名誉教授らも発言して熱い討論が行われました。

(謝辞)本講演会は株式会社三菱UFJ銀行様より『役員自身企画実施する社会貢献活動』の取組みの一つとして50万円のご寄付を頂いて実現しました。篤く御礼申し上げます。

内容詳細は POLE 次号別冊(2023.9)として報告書を発行予定です。



ロンドンにおける B・ピウスツキ特別展 「ニシパ〜アイヌの中で」

2022年10～11月、ロンドンのピウスツキ研究所創立75年を記念してブロンスワフ・ピウスツキの功績を讃える催し(10/3)大英図書館 The British Library でトーク「帝国時代の民族誌。ブロンスワフ・ピウスツキとアイヌ民族 Ethnography in Times of Empires. Bronislaw Pilsudski and the Ainu People」、(10/7-9)ロンドン西地域、テムズ川近くのハマースミススのウイリアム・モリス協会 The William Morris Society と、(10/24-11/4)ポーランド社会文化協会 Polish Social and Cultural Association で、写真・パネル・文献を中心とした特別展「ニシパ〜アイヌの中で Nispa. Among the Ainu」が開催されました。(吉田敬子、ロンドン在住)



(左から)テムズ川、ウイリアム・モリス協会入り口、入場者たち、ピウスツキ研究所のスタッフ2人

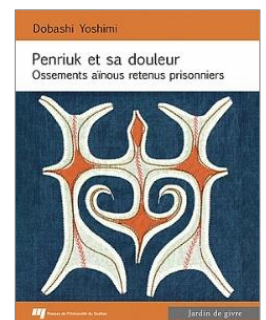


展示場内部、(右端)ろう管蓄音機

— 紀伊国屋 WEB STORE で予約受付中(2023/05 発売) —

土橋芳美著 『痛みのペンリウク〜囚われのアイヌ人骨』の仏訳の出版

Dobashi Yoshimi, Penriuk et sa douleur: Ossements aïnois retenus prisonniers, Presses de l'Université du Québec, 2023.1
カナダ・ケベック大学出版会刊、緒言 Daniel Chartier, 紹介 Jeffrey Gayman, 序文 花崎皋平, 訳 Etienne Lehoux-Jobin
「ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ」POLE96-2*の訳も収録



* <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE96-2DobashiNagaya.pdf>



追悼

津田モニカ・シフルスカさんを悼む 井口 時男

早朝の電話はたいい不吉だ。九月十一日、日曜日の朝七時、電話が鳴った。ポーランドの津田晃岐君から。モニカさんが亡くなったという。しばし、声も出ない。亡くなったのは現地十日朝。日本との時差は八時間。つらくあわただしい一日を過ごした後、こちらが朝を迎えるのを待って電話をくれたのだ。

病気で治療中だったことは承知していた。だが、こんなに早いとは。まだ五十歳になるかならぬかだったろう。念願だった漱石俳句のポーランド語訳“Natsume Soseki, Haiku z lat 1889-1895”を出版したばかりだったのに。その無念、察するに余りある。気の毒でならない。

モニカ・シフルスカ (Monika Szychulska) さんは、東工大の私の研究室に博士課程から所属した。国費留学だったが、修士課程ではなぜか他の専攻で文学専門ではない研究室に配属されており、漱石研究に専念したいという意向だったので、私の研究室に移籍したのである。私は漱石の専門家ではないが、彼女は修士時代から定期的に東大の小森陽一教授のもとに通って指導を受けており、博士課程でも通い続けた。小森氏には博士論文審査員にも加わってもらった。他大学の学生にも快く門戸を開いてくれた小森氏に深く感謝している。

漱石ひとすじ

博士課程在籍中に漱石『三四郎』のポーランド語訳を出版し、二〇〇三年三月に博士号を取得して帰国。ポズナンの大学で日本文学を教えたが、体調を崩して退職。ポーランド文学研究で留学中だった津田晃岐君と結婚。退職後も漱石関係の様々なイベントなどを企画したりして、まさに漱石ひとすじだった。『道草』や『明暗』の翻訳も構想していたと聞く。

今回のポーランド語訳漱石句集は、一九九六年版漱石全集を底本に、一八八九九年(明治二十二年)から一八九五年(明治二十八年)までの五百句余りを収録している。晃岐君との共同作業である。(前記の書名でネット検索すれば書影や必要情報が見られる。私のブログ「批評と俳句:井口時男の方丈の一室」八月十八日の記事でも紹介している*。)

残念ながら私はポーランド語が読めないし、漱石や俳句の翻訳事情にも疎いのだが、漱石俳句の本格的なポーランド語訳はおそらく初めてだろう。ポーランド語に限らず、また漱石に限らず、一人の作者のこれだけ多数の句をまとめて外国語に翻訳紹介したのも初めてだろう。漱石翻訳史上のみならず、俳句翻訳史上でも、また日本文学の海外紹介史上でも、画期的な仕事だろうと思うのだ。(海外への俳句翻訳事情に詳しい方はぜひ周囲に「宣伝」していただきたい。)

現在の『定本漱石全集』が収める句数は二五六〇句。いずれは全句翻訳するつもりだったのではなからうか。

彼女とは頻繁にメールのやり取りをしていたし、たまには電話ももらったから、日本以上に出版状況の厳しいポーランドでどんなに苦労したかはよく承知している。私は早くからネット上での公開という妥協案を提示したりしていたが、彼女はあきらめなかった。幸い奇抜な出版社が現れてようやく出版に漕ぎつけたのである。その一冊が私の手元に届いたのは八月初旬。それからわずか一か月後の訃報だったのだ。

詩も書き絵も描く多才な女性だった。日本語で俳句も作り、「陽石」という俳号も持っていた。「石」はむしろ漱石の「石」。陽気な漱石だね、君にふさわしいよ、などと冗談を言ったこともあった。この翻訳句集には、表紙の菊の花も含めて彼女の描いた花や植物の絵が十八葉、カラーで、一つ一つに一頁をぜいたくに使って収録されている。俳画風だ。すべて「陽石」の落款入り。ほぼ彼女の思いのこなった会心の一冊だ。

B5より少し小さい判型で全一四頁。瀟洒な印象の手に取りやすい一冊だ。左から、日本語横書き三行で漱石の句、日本語の発音がわかるように三行のローマ字表記、三行のポーランド語訳、と並ぶ。一頁に七句ほど。ところどころ、句の下に数行から時に十数行のポーランド語の注釈が付く。

思い出すことは多い。在学中は、ゼミが終れば居酒屋へ、居酒屋のあとはカラオケへ。啞然としている日本人学生たちの前で、私と彼女は美空ひばりや三橋美智也を歌いまくったものだった。(日本人学生は誰も知らないそれらの歌を、彼女はワルシャワ大学の研究室に誰かが置き忘れていったカセットテープで覚えたのだった。)二〇〇五年九月には招待してくれたのでポーランドの「黄金の秋」を十日間も堪能し、ポズナンからクラクフへ、ワルシャワへ。さらにアウシュヴィッツへも行った。二〇一三年八月には晃岐君の運転で六日間かけて能登半島を見て回った。(能登半島の句は『天來の獨樂』に載せてある。)

そういった思い出の詳細は前述のブログの十月十六日の記事に書いたので省くことにして、最後に、本誌前号に載せた追悼句をあらためて掲げておく。



結婚5周年(2013)の晃岐・モニカ夫妻 (金沢にて)

(三句目は一部修正した。)

訃報を受けた九月十一日はとても出歩く気になれず、日課の散歩もしなかった。その翌朝の散歩で、今年初めて彼岸花が咲いているのを見つけた。

「彼岸過迄」(漱石)生きられずに亡くなったモニカさんのために。(漱石のタイトルの「彼岸」は春の彼岸なのだが。)

漱石を慕ひし君に彼岸花
悼むとは痛むことなり彼岸花
悔やむとは悔いることなり彼岸花

(いぐち・ときお、俳人、文芸評論家、元東京工大教授)
(初出)『鬘』(たてがみ) 86 (2023.2.20)



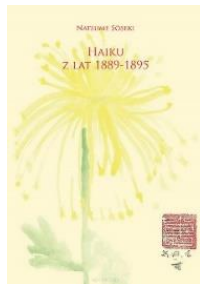
『夏目漱石～1889-1895年の俳句』
津田モニカ; 津田晃岐 (編/訳/注) ポズナン 2022

Natsume Soseki, Haiku z lat 1889-1895,
tłum. Monika Tsuda i Terumichi Tsuda,
Wydawnictwo Rys, Poznań 2022

津田モニカさんを偲んで アグニエシカ・ジュワフスカ 梅田

モニカさん、人生の儚さに悲しくなります。なぜ私たちの再会は叶わなかったのでしょうか？
あなたが残したのは、漱石の初期の俳句のご夫妻での共同訳と、美しく描かれた草花のポートレートだけ。とても繊細に描かれた水彩画は光に包まれ、儚げです。

絵画では、あなたは子規の熱心な弟子という印象ですね。あなたは漱石が特にこの師に捧げた多くの句を引いています。以下にその一部を引用します。そのおかげで、二人の偉大な友情と、ヨーロッパの文学的・美的・倫理的価値を伝える使命において、これらの偉大な芸術家がいかにお互いを補い合っていたかがよくわかります…。詩学や文学理論だけでなく、人生観全般についてもそうです(武田充啓「若き漱石～夏目漱石の正岡子規への手紙を読む」奈良工業高等専門学校研究紀要52(2016)、24[35]頁)。



を語ることは難しい。この二人の出会いが創作と文学観の両面で互いに実り多い影響を与えたことは非常に興味深い。松山藩の下級武士の子として生まれた正岡子規(1867-1902)と、江戸の大地主の末っ子として生まれた夏目漱石(1867-1916)には、社会的な違いがあった。漱石は養子に出された家と複雑な関係を持ち、それが小説『道草』(1915)の原型になっている。

子規と漱石は、性格は全く異なるが、1889年以降、精神的に非常に親しい友人同士だった(武田、同前)。20歳になるまで、二人は同じような教育を受けている。共に漢学塾に通い漢詩を読み解釈し詠むことを学んだ。共に高等教育への準備のための英学塾の優秀な生徒であり、また共に文人画の道を歩んでいた。

子規は20歳の時、結核のため帝国大学国文科を中退せざるを得ず、和歌や俳句を詠み、古典文学の評論家として活躍した。

漱石は同大学英文科を卒業、英語教師として、まず東京で、次に小説『坊っちゃん』(1906)の舞台となる子規の故郷、松山の中学校で働き、その後、熊本で教鞭をとった。東京に戻るとすぐ奨学金を得て英国に渡り(1900-03)、そこで日本文学に対する自分の考えを振り返り再評価し、その間も俳句や漢詩を詠み続け(それが最後まで自己表現の最も重要な媒体であった)、英文学に関する重要な論文も発表した。子規が亡くなるまで、彼はまだ小説を発表していなかった。漱石は神経疾患と胃潰瘍に苦しみ、1907～1916年までの人生の最後の10年間にほとんどの小説を書いた。

子規は自分の文学理論を発展させ、英文学者、あるいは欧文学者漱石の目を通して日本の古典を見つめ、「知的慾求」と「自己表現の慾求」の原理を実践し(加藤周一著作集5『日本文学史序説』下、平凡社、1980.5、「子規と漱石」378頁)毎日たくさん書いた。

蘭の香や門を出づれば日の御旗
ran-no ka-ya mon-o izureba hi-no mihata
zapach storczyków wystarczy wyjść za bramę -
japońska flaga 73

不立文字白梅一木咲きにけり
furyūmonji hakubai ichiboku sakinikeri
„prawda nie w księgach” samotne drzewo śliwy
rozkwitło bielą 166

咲きたりな花山続き水続き
sakitari-na hanayama tsuzuki mizu tsuzuki
rozkwitły wreszcie ciągną się góry w kwiatkach
ciągnie się rzeka 176

誰が家ぞ白菊ばかり乱るるは
ta-ga ie zo shiragiku bakari midaruru wa
kto tutaj mieszka? nic tylko chryzantemy białe
bez ładu 204

漱石と子規

そのため、子規の創作活動を抜きにして漱石の俳句

1889年暮、二人の偉大な芸術家は齟齬を見せる。子規は『七草集』に収めた文で漱石に厳しく批判された。この時期の手紙には「大兄の文はなよなよとして婦人流の習気を脱せず」「毎日毎晩書て書き続けたりとて小供の手習と同じ」「この original idea が草紙の内から霊現する訳にもあるまじ」などの非難が含まれ、漱石は「伏して願はくは」「手習をやめて余暇を以て読書に費やし給へよ」と批判を締めくくっている(武田、25-26[34-33]頁)。

写実の価値

そのような非難は子規を深く傷つけたかもしれないが、どうやらそれは良いアドバイスだったようだ。二人の作者の間で重要な思想の交換が行われた。子規は1898年2~3月に雑誌『日本』で10回にわたり、905年に編纂された最初の勅撰和歌集『古今和歌集』以来の古典短歌に対する鋭い批評を連載した。批判は主に、奔放な詩的想像力、装飾性、つまり「今ここ」とはほど遠い空虚な詩的表現に向けられた。一方、友人の批評は、真理や具体性、リアリズムの追求という形で実を結んだ。おそらく子規はこのとき文学の中で現実を写生する写実の価値を見出したのだ。

漱石は満足して「写実」の思想を引き継いだ。それは写実画の始まりといえるが、まだ完成にはほど遠いものだった。子規は写実主義を詩、散文、絵画において文学的イメージを伝達する方法とした。

奨学金を受けた若い学者である漱石が、なぜ英国や、欧州のロマン派の詩の英訳に魅了されなかったのかという疑問が生じるなら、日本の詩形式の中だけでなく、特にヨーロッパの詩を背景として、何が俳句の形式を際立たせているかを(掘り下げた説明には別稿が必要なので)短く表してみるとよいだろう。漱石は英文科時代からヨーロッパの詩に親しんできたが、英国滞在中はまるでそれから身を護るかのようだった。明らかに、彼はヨーロッパと日本の詩の精神の違いをあまりにも鋭く感じていたようだ。

私自身、ポーランドの俳句を日本語に訳すのに苦労していて、いつも、翻訳というより「文化的解釈」になってしまうので、よくわかる。

私が参加しているポーランドの古典俳句派は、芭蕉-蕪村-一茶-子規-虚子-素十、現在は村松紅花-土十-真下鮎という系譜から、日本の「葛の会」とつながっており、俳句に対して根本的に古典的なアプローチをとる。だからこそ、五七五のリズムを保ち、季語を必須とし、句の調和というか全体のメロディーを作りつつ、葛の会は言葉の節約、語りの放棄、選択した自然の要素の熟視、鑑賞者のための軽みと詩的空間の保持、詩的主体の隠蔽、そして何よりも、まさに

子規が書いていたような未完の「現実のスケッチ」の写実的性格の維持を求めている。

子規は、漱石との対話の影響を受けて、俳句について次のように書いている。

「俳句は文学の一部なり。文学は美術の一部なり。故に美の標準は文学の標準なり。文学の標準は俳句の標準なり」(『俳諧大要』『日本』1895)

俳諧において子規の師匠は、芭蕉よりもむしろ蕪村や一茶だった。まさに子規は、作品において写実主義を好んだからである。この俳人の最期の句には、表現様式として、写生がはっきりと現れている—

あちら向き古足袋さして居る妻よ
achira muki furu tabi sashite oru tsuma yo
odwrócona zdartymi łyskasz tabi żono moja

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
hechima saite tan no tsumarishi Hotoke ka na
kwitną już trukwy a nadmiar flegmy dusi to ty,
Buddo?

痰一斗糸瓜の水も間にあわず
tan itto hechima no mizu mo ma ni awazu
flegma litrami nawet już wody z trukwy zabrakło
(ポーランド語は梅田訳)

詩の「文化的解釈」

まとめに代えて、加藤周一が選んだ、詩の翻訳、特に遠い文化の言語に翻訳する場合の「不備のある」訳の一例を挙げる—漱石が小松竹治(月陵、1876-1964)の『沙翁物語集』序(1904)のためにシェイクスピアからとった10句の俳句形式の訳の一つ(『ハムレット』第5幕第1場)である。原文及び漱石の「文化的解釈」はこうだ—

That skull had a tongue in it, and could sing
once...

Ta czaszka miała także język i mogła śpiewać...
(Józef Paszkowski 訳.)

骸骨を叩いて見たる董かな
gaikotsu o tataite mitaru sumire ka na
w ten pusty czerep zapukał ktoś niepewnie może
fiołki?
(梅田訳)

津田晃岐・故モニカ夫妻が翻訳した俳句は、日本の伝統に深く浸り、同時に、良くも悪くもヨーロッパの文化を経験した詩人・作家・画家の俳句です。ぜひ読んでみてください。

(Agnieszka Żuławska-Umeda, 元ワルシャワ大学
助教授、2023.2、安藤厚/津田晃岐訳)



グディニャ NNW 国際映画祭 2022 に参加して

浅野 由美子

コロナ禍3年、御多分に洩れず映画祭も、中止やオンライン開催に追い込まれました。もちろん移動も激しく制限され、国内はもとより海外に至っては世界中鎖国状態でしたが、やっと移動が可能になりポーランド開催の映画祭に出席してきました。

NNW国際映画祭は今年14回目となる比較的新しい映画祭です。開催地は首都ワルシャワから北西へ約370km、バルト海に面した港町グディニャです。隣町グダニスクは東欧を民主化へと導いた労働組合「連帯」発祥の地です。NNWはポーランド語“Niepokorni, Niezlomni, Wyklęci”の略で、訳すと「反抗、不動、孤独」となり、抵抗の歴史に焦点を当てたドキュメンタリー中心の映画祭です。

この映画祭は、映画館・劇場・美術館・野外舞台・書店・カフェ・バー・公園等がギュッと集中した一角で、更に仮設建造物や野外スクリーンも設置されて、朝から夜遅くまで8カ所ほどで同時に上映や催し・展示が4日間にわたり行われていました。すべてがポーランド語表記のため、映画上映という事象以外は何が行われているのか謎のままだったのは残念でした。

『八十五年ぶりの帰還』上映

映画祭2日目9月29日の18時から上映されました。応募時の条件は「英語字幕が付いていること」で、藤野知明監督作品は新作の長編が3本あるにもかかわらず、字幕を付ける時間的余裕もなく、まあダメ元でことで唯一英語字幕のある短編『八十五年ぶりの帰還～アイヌ遺骨 杵臼コタンへ』(2017)を提出したという情けない理由でした。

上映は全作品ポーランド語だとは聞いていたし、英語テキストも送ったし、当然ポーランド語字幕が入るのだとばかり思い込んでいたら、なんと！ 英語字幕と元々のアイヌ語・日本語音声映像に被せて聴こえてきたのは、男声のナレーション。セリフも文字説明もひとりの男性が語り続けているのにはビックリ！これって手抜きなのか？！と呆然としていたのですが、宿のテレビで外国語映画やTVドラマをつらつら眺めていてわかったことは、元の音声を残してナレー



映画祭ロゴ、公式プログラムと関係者タゲ

ターが自国語を被せるのがポーランドスタイルのようでした。25分の単独上映だったので、そのぶんたっぷり観客と監督との質疑応答の時間を持ってました。

ファイナル・ガラ

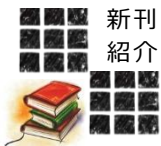
最終日10月1日夕方6時より、ファイナル・ガラが始まりました。『八十五年ぶりの…』が上映された会場と同じでしたが、一歩中に入ると見間違えほど華やかな設えに変身していました。照明・調度・たくさんのテレビカメラ、そして着飾ったり普段着だったりの来賓や関係者で溢れかえっていました。各賞を発表し、受賞者がスピーチし、主催者の挨拶なんかで1時間もあれば終わるだろうと予測していたのが、ショパン曲のピアノ演奏から、各賞発表の合間合間にロマン派ばりの詩の朗読や、「連帯」運動のときからの英雄ロックスターの熱唱に、ウクライナ人歌手やアレコレの豪華絢爛なショーも繰り広げられ、その特別な催しは3時間にも及んだのです。

ガラ終了後は、ロビーにて用意されていたワインと軽いつまみで深夜まで交流会がありました。でもそれは翌日聞いた話。私たちは少々交流してから疲労困憊で早々に退散。宿に戻ってからポーランドにたくさんあるコンビニで、蛙という意味の“ジャプカ”で購入したカップ麺の遅い夕食を済ませました。

すぐ隣の戦争

『八十五年ぶりの…』は国際ドキュメンタリー映画コンペ部門だったのですが、受賞したのはウクライナの作品でした。ガラのプログラムに会場全員が立ち上がってウクライナ国旗を掲げるというパフォーマンスもありました。ロシアとも国境を接しているポーランドにとって、あの戦争は目と鼻の先の出来事なのだと実感しました。

国境を接するポーランドへは避難民全体の約4割の500万人(北海道人口と同等)が身を寄せていた時があり、ポーランド政府は巨額の国家予算を割いて避難民を支援しているといえます。そのため今年は文化・芸術に対する補助金が減っているとのこと。それでも様々な企画や場所での文化に支援し大切に行っているお国柄だとよく分かりました。翻って日本のあまりにお寒い文化支援事情に深い溜め息が出てしまいました。(あさの・ゆみこ、映像制作・版画家、会員)



新刊
紹介

祝 第60回(2022年度)北海道詩人協会賞 受賞!

小篠真琴詩集『へいたんな丘に立ち』文化企画アオサギ 2022.5

今金町在住の詩人小篠真琴氏は本名の越野誠で2021年10月当協会に入会。POLE105号に《新会員のひと言》と、更に「オンラインコンサート“〈シロンスク〉との旅”を観て」にも感想を寄せ、107号には詩「この町に生まれ」を発表した。コロナ禍で仲々参加できなかったようだが最近二度ほど行事参加があったのでご記憶の方もおられるでしょう。

少年はいま、つばさを手にした

2018年の第一詩集『生まれた子猫を飼いなす』は大好評で一気に存在感を示した。

2022年には第二詩集『へいたんな丘に立ち』を發行。カバー写真は著者の撮影。難しい言葉や言い回しはなく素直に読み進められ、こちらの胸にひたひたと沁み入る安らぎと暖かさのある詩集と思った。小篠さんの半生に裏打ちされた“痛み”から浮かび上がる澄んだもの、それに魅了された。

全国各誌で絶賛されている！との声が届いた頃、ビッグニュースが飛び込んだ。日本詩人クラブ主催の第33回新人賞に上位ノミネートされたという。これだけでも凄いのに日本現代詩人会主催の第73回H氏賞(詩の芥川賞ともいわれる新人賞)第1次選考でも上位にて候補となる。こんな大きな賞二つ同時に候補になるとは！ドキドキし乍らの結果は誠に残念乍ら本賞受賞には至らず。でもでもこれは凄い事なのであります。

詩集のあとがきも実に好ましいものです。「詩篇たちに私の夢を叶えて欲しい」に続く師への感謝の言葉も素直に伝わりますし、お終いは「新しい旅はまだ始まったばかりだと気づいた日に、また一歩ずつ歩いていきたい」との柔らかな決意表明も清しい。

小篠氏の活躍の場は広く、道内では「フラジャイル」「Asgrd」「極光」他、道外では「指名手配」他多数。詩の他に小説を「ざいん」に発表、トップに掲載された。短歌、俳句でも賞に入り今はエッセイに挑戦中。どこ迄飛躍していくのだろうか。

詩集の作品はどれも魅力いっぱい、特に北海道弁が迫力の「投資家気取りを」、シュールながら温もり溢れる「朝のひと時」、指から離れたほくろがイソギンチャクに棲み着き再び帰ってくる「ツアラトウストラを聴きながら」、「ふるえる木を／そっと包み込むように支える」から始まる「支える」等が際立っている。

何らかの方法で当協会会員の方々にも目を通して頂けたらと願う。

最後に一番好きな詩を一部分ではありますがお届けして終わりたい。(菅原三栄子、会員)

つまずいた少年

～略～ 足を挫いたふりをした少年は／
すり傷だけで／済んでいたから／スニーカーのひもをむすび直せば／トップランナー／少年はいま、つばさを手にした



『ポーランドニア～最後の夏に』 工藤正廣(著) 未知谷 2022.9

ロシア文学者で詩人の工藤正廣さんが、小説『ポーランドニア』を未知谷から上梓(じょうし)した。小説と言われるとご本人は違う、と言うだろうが、今はこの国の文学上のジャンルにしたがっておく。一読してこれは、著者がどうしても書いておかなければならないものだ、まず思った。

むかしの夢幻 時を得た物語

冒頭の悪い夢を読むと、このような書がなぜ、いま書かれなければならないかが、分かるような気がする。いわば時を得た書物だ、これは。

「洞窟のドラゴンのように火を吐いて、(中略)殺戮(さつりく)を原理とし(中略)大地を赤い血と骨で肥沃(ひよく)にしてきた」とうそぶくカフカス訛りのポリシェヴィキの長老はスターリンで、彼に真夜中呼びつけら

れる都会人のヴォロージャは、明らかに今年2月に理不尽なウクライナ戦争に突入したロシアのプーチン大統領なのだ。また本編の語り手マサリクは作者そのひとであろう。

文体はそれこそ変幻自在で手紙になったり、回想になったり、はたまた詩が何度も引用されて読者を飽きさせる事がない。



箴言めいたものがいくつも散見し、このあとこの書のページを涉猟すれば、一冊のアフォリズム集ができるようにも思った。たとえば、こんな言葉がある。

「いったいわたしたちは何であったのか、(中略)ぼくらはたとえて言えば、一冊の詩集なのだ。記憶の詩集なのだよ」

また「どんなに悲惨な暮らしであれ、人生に献身すること、その希望で生き抜くこと。歳月はたちまちに過ぎ去り、終焉(しゅうえん)すること。夢のような活力のある青春は、終焉する。その時こそ、献身が希望になるだろう。まことに近くにある者を愛せよと言うが、それは愛することがまだ容易だということなのだ。憎悪によって生きることはできない。愛する心でなら、どのようになっても生きることができよう」

あるいは「出会いとは奇跡の別名と言っていいかな。人は出会いの集積そのものだ。出会いの金庫だよ」

「いのちはことばだ。そしてことばはいのちだ」

が、この作品の圧巻はポーランドのロシア詩の老研究者、リラック氏から何枚かのドル札と手紙を託されたマサリクが、パステルナークの愛の片腕、オリガ・イヴィンスカヤを訪ね、懇親するシーンだ。ここはあまりにも

感動的なので、引用はひかえる。そこで彼女は、マサリクを歓待しながら彼にパステルナークの詩をそらんじるように促し、マサリクが応じて、詩が音楽のように流れるとイヴィンスカヤがたちまちそのあとをそらんじる場面だ。

「発着駅よ ぼくのかずかずの別れの／出会いと別れの耐火性の抽斗(ひきだし)／ぼくをみちびく経験をつんだ友／ひとたびその功績を数え上げれば——きりがない」

本邦の現代詩の世界では絶対ありえないものがそこにはある。現代日本では、詩が音楽であるという真理は無視されているから。

あえて結論は不要とおもう。著者はあとがきで言っている。「四十年も過去の、むかしの夢幻(ゆめまぼろし)を、ようやく今ごろになって、新しい物語として蘇生(そせい)させることが出来た。(中略)この物語は頌歌(しょうか)でありまた鎮魂歌でもあるだろう。(中略)これは現実のおとぎ話なのだ」

工藤さんはロシア文学者として数々の榮譽にも輝き大きな成果をあげてこられたが、ここでご自身のいちばん言いたいことを言いきってしまった。

(瀬戸正昭、詩人、詩誌「饗宴」主宰)

(初出)北海道新聞2022.12.13

THEATER
KINO

シアターキノ30周年に寄せて



中島 洋

1992年にシアターキノを設立して昨年の2022年で30周年になりましたので、少しだけ振り返ってみます。

私は北大映画研究会員だった1970年頃に映像の自主制作、自主上映を始め、中退して東京でCMやPR映画の撮影助手、ピンク映画の助監督などを少し経験しましたが、今でいうパワハラがある業界にぶつかってしまい、出身の神戸ではなく、札幌に戻り、小さな飲み屋をやりながら、自分でインディペンデントな映像を創るようになりました。

やがてそれはビデオアートや、インスタレーションなどのアート作品や舞台美術など、映像を中心とした表現の分野をひろげるようになりました。同時に、その表現を発表する場がほしくて、演劇、美術、舞踏、写真、音楽などの仲間と一緒に「駅裏八号倉庫」という自由な表現空間をつくり、5年半で解散後、映像ギャラリー「イメージ・ガレリオ」を、友人たちの出資を集めて作り、妻が運営の中心になりました。

そして、1992年に、札幌のミニシアターが閉館になり、商業アート作品が見れなくなるという危機感から、市民出資を募って(まだNPOやクラウドファンディングもない時代でした)、ミニシアター「シアターキノ」を設立しました。29席という日本一小さな映画館でした。

はじめはやはり赤字でしたが、4年目から黒字になり、1998年に2スクリーン体制のミニシアターになり現在に至るわけですが、私としては映画館を作るのが人生の目標ではなく、その時、その時で、札幌にないもの、文化の「場」作りを自分なりに考え、役割としてやってきたように思います。

シアターキノをベースに、ワークショップや講座、映画祭や芸術祭の手伝いなど、本当に様々な文化活動に関わってきましたが、キノ設立と同時に休止していた、自分自身の制作も5年前から再開し、映像作家、美術家としての作品制作をしています。遂に念願の短編映画「Wakka」が完成し、4/22(土)～28(金)にシアターキノで公開いたします*。水の起源を探る映像と音だけで表現した抽象的な作品ですが、ぜひご覧いただければ嬉しいです。

ポーランドのウジツ映画大学に留学し今や日本映画を支える一人になった石川慶監督からも「映画がなにを語るために生まれたものなのか、それをあらためて教えてもらった」とコメントをいただきました。また、キノ30周年記念出版『若き日の映画本』にも監督に人生の一本として「灰とダイヤモンド」を書いていただきました。シアターキノにて好評発売中です。(なかじま・よう)



* <https://www.wakka-movie.com>



出演者募集！ 「午後のポエジア」は、毎年さまざまな趣向、テーマを重ねてまいりました。コロナ禍を乗り越え、去年はポーランドを代表するミツキエーヴィチ作「祖霊祭」にも挑戦しました。

今年は、本来の午後のポエジアのペースで、詩の朗読をはじめ、歌、楽器、舞踊、映像、発表、演劇等、会員の皆様の自由な発想で、軽快、重厚、分け隔てなく、多様な表現、演出の担い手を募ることになりました。

豊平館の素敵な空間で、会員及びご縁のある皆様と共に、ポーランド文化との交流の楽しいひとときになればと思います。ご応募をお待ちします。

ご応募は下記、事務局の電話・メールへ (企画担当)

※ 日程予約済み、詳細は今後調整します
※ 同日午後「第37回定例総会」開催

会員動向 (2023.1~3)

逝去: 加藤多一さん (謹んでご冥福をお祈りします)

入会: 栗原成郎、林祥史、退会: 小田晃孝、栗原朋友子、鷲見健 (敬称略)

ご寄付 (2023.1~3) 深謝!

(1口千円) (2) 石田レイ子、高橋健一郎 (1) 小山内道子、小野幸代 (順不同)

年会費 (2022.9~2023.8) 納入のお願い

年会費: 一般3,000円、学生1,500円

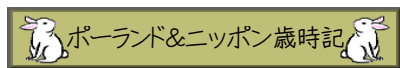
また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問合せください

寄稿募集

本誌への寄稿を募集します。〆切は毎年3月末/7月末/11月末、分量は1000~1500字程度、テーマ、ジャンルは自由です。詳細は下記事務局の電話・メールへお問合せください



俳句連載「ポーランド&ニッポン歳時記」は前号をもって終了しました

故津田モニカさん、ピョトル・ヴジェチヨノさん及び霜田千代麿さんには、長きにわたりご寄稿・ご尽力を賜り、厚くお礼申し上げます (POLE 編集委員会)

POLE109 目次

創立35周年記念演奏会..... 1
 〈新会員のひと言〉憧れのヴァイオリニスト ヴィエニャフスキ(徳田和可)／ポーランドの地に想いを馳せて
 (鈴木飛鳥)／憧れの英雄ポロネーズ(中島幸治)..... 2
 〈新刊紹介〉『シヨパン〜プリンス・オブ・ザ・ロマンティクス』(三浦洋)..... 3
 〈例会報告〉ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2023(園部真幸)／スコリモフスキ監督最新作
 『EO イーオー』..... 4
 〈報告〉《特別講演会》プロニスワフ・ピウスツキの遺したもの／ロンドンにおけるB・ピウスツキ特別展「ニ
 シパ〜アイヌの中で」(吉田敬子)／『痛みのペンリウク〜囚われのアイヌ人骨』の仏訳の出版..... 5
 〈追悼〉津田モニカ・シフルスカさん(新刊紹介)『夏目漱石〜1889-1895年の俳句』(井口時男、アグニエシ
 カ梅田)..... 6
 グディニャNNW国際映画祭2022に参加して(浅野由美子)..... 9
 〈新刊紹介〉小篠真琴詩集『へいたんな丘に立ち』(菅原三栄子)／『ポーランド〜最後の夏に』(瀬戸
 正昭)／シアターキノ30周年に寄せて(中島洋)..... 10
 第12回朗読会「午後のポエジア」出演者募集！..... 12
 〈新刊紹介〉『ウクライナ青年兵士との対話』(長縄光男)..... (別紙) 13
 『クレクス先生のふしぎな学校』(住谷秀保)..... (別紙) 14

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方	安藤厚／新井藤子
	TEL・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com	池田光良／氏間多伊子
	東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付	熊谷敬子／松山敏
	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	

新刊
紹介

長詩『ウクライナ青年兵士との対話』

土橋芳美（著）サッポロ堂書店 2022.7



2022年10月9日、ウクライナ大橋爆破—「ついにはやってしまった」—これで「ウクライナ戦争」は新しい段階に入ってしまったと思ひ、私はしばし言葉を失った。「下手人」は誰だか、今のところわからない。例によってプーチン流の自作自演という説もあるし、ウクライナ側の仕業という説もある。しかし、今や、それはどうでもよいことだ。

案の定、翌日からウクライナ全土へのミサイルによる無差別の爆撃が始まってしまった。

「ああすればこうなる」と知りながら、「ああやってこうなってしまった」という、お互いの愚かさの連鎖の結果が今の惨状だ。「愚かさの連鎖」をこれまでやり続けてきた人々のことだ。これからも愚かなことをやり続けるのだろう。本当の結末はいつ、どんな形で訪れることになるのだろう。それを思うだに身の毛がよだつ。

問題は、今や最終的な決定権がほんの少数の者の手に握られていることだ。最早、「民主主義」は機能しなくなってしまったのか。最早、無辜の民に出番はなくなってしまったのか。最早、民衆はただ固唾を呑んで見守ることしかできないのか。

「チャランケ」考

そんな折、私は一編の詩集を改めて手に取った。題して『ウクライナ青年兵士との対話』—著者は「土橋芳美」。元来、詩の世界に疎い私は、この詩人がこの世界でどのような地位を占めているのか知らないし、また、この長詩の「詩」としての出来栄がいかなるものか、判断する目を私は持たない。だが、読後には心に沁みるものがあった。その思いを手繰ってウクライナで今進行中のことを考えた。

語り手の詩人はアイヌの老婦人—ある朝「涙の音」に目を覚ますと、傍らに一人の青年が苦しげに座っていた。それはウクライナの戦争で瀕死の重傷を負ったウクライナの青年兵士であった。傷のあまりの痛さに意識を失い、魂だけがこうしてここ—「サッポロ市ツキサム」に飛んできたのだった。

アイヌの老婦人とウクライナの青年という取り合わせには、胸に「ストン」と落ちるものがある。アイヌの民もウクライナの民も、共に、比べることもできないほどに力の差のある圧倒的な強者の抑圧のもとで、それぞれの歴史の開闢以来といってもよい程の長きにわたり、呻吟してきた人たちだからだ。今日の日本にあって、ウクライナの人たちと心底連帯できるのは、アイヌの人たちと、それから、沖縄の人たちだけだろう。

アイヌの老婦人はウクライナの人々のために朝に夕に、神さまに祈った。「この戦争が早く終わりますように ウクライナの人々が 穏やかな日常を 一刻も早く

とり戻せますようにと 祈って 祈って 祈っていたの」

青年の魂をここに呼び寄せたのは、この「熱い祈り」であった。青年は語る。「今 ウクライナの空は 一面赤い塵埃に 覆われています 孔雀色した 美しい空が 消えました 森では 無惨にも ぼくと同じように 樹々が内蔵をみせて 倒れています」「美しい森はもうありません」「戦争は ただ ただ 破壊です 憎悪のはてしない連鎖です」

でもね、と老婦人は青年兵士に語る—「アイヌ民族に」「チャランケ という方法があるの」

「チャ」は「言葉」、「ランケ」は「下ろす」—「つまり相手の心に 納得のいく 言葉を下ろしあうの」「三日三晩はおろか お互いが 納得するまで えんえんと続けたっていうの」そうしたことは「個人でも あるいは民族や国と呼ばれる 集団でも 工夫すれば 出来ることじゃないのかしら」

そして、老婦人は、プーチンとゼレンスキーが「チャランケ」したらいいのに、と思う。「この二人に 向きあってもらい 三日でも 四日でも 二人が真摯な言葉を 下ろしあうのよ 今 周りで はらはらしながら 見守っている国々が 制裁ではなく このアイヌ式の チャランケ チャ 言葉 ランケ 下ろす」「そういう 話しあいの場を 設けることを すべきだと思うの」

誠に「夢」のようなお話だ。「現実」を「リアルに」論ずる者たちは、このような「夢」を「荒唐無稽」と一蹴するだろう。だが、そうした人たちがいずれかの立場から是非善悪を言い立て合う「理知の言葉」によって、今、何が解決するというのだろうか。「言葉を失うことが戦争なのね」と老婦人は言う。だが、ここに言う「言葉」とは、「理知の言葉」ではないだろう。どんな言葉を失うことによって今の惨状があるのだろうか。

「ロシア兵も ウクライナ兵も そう 死んではいけない 殺してはいけない」

素朴な言葉だが、私たちが今やこのような言葉を「祈り」を込めて叫ばねばならないのではないだろうか。

「ロシア兵も ウクライナ兵も そう 死んではいけない 殺してはいけない」

(長縄光男、横浜国立大学名誉教授)
(初出)『詩と思想』2023年1・2月合併号

『クレクス先生のふしぎな学校』

ヤン・ブジェフファ(作) 小椋彩(訳) 福井きとこ(絵) 小学館世界J文学館 2022.11

子供のころ心踊らせた、ヤン・ブジェフファ作『そばかす先生のふしぎな学校』(内田莉莎子訳、ヤン・マルチン・シャンツェル画、1971)が2022年、旧訳からおよそ半世紀ぶりに、小椋彩さんの生き生きとした新訳によって、小学館世界J文学館デジタルブックという形式で蘇りました。

ポーランドで有名なこのお話は、落ちこぼれの主人公アダム・ニェズグトカが大きな失敗をして、両親に連れられてクレクス先生の不思議な学校に入学した半年後から、アダムの日記をもとに記憶をたどる形で始まります。

クレクス先生の授業は不思議で楽しさ一杯。生徒たちは地球儀のようなボールを蹴って止まった場所にある地名を当てるゲームを提案したり、色ガラスで料理を作ったり、不思議で楽しい授業を体験しつつ成長していきます。学校を囲む塀にはたくさんの扉があり、「白雪姫」をはじめいろいろな童話の世界につながっていて、ときどき塀を越えた交流もあって、まるで様々な童話の中心にいるようです。

この物語は最後に不思議な展開で締めくくられます。登場人物も奇抜な発想を深め、最後までめくめく驚きの連続です。

小椋さんの訳は原著により忠実で、全体を通じて多くの工夫が見られます。

例えば、クレクス先生が学校の生徒達全員で「大穴小穴工場」を訪れた時、出迎えてくれた技術者の名前は、旧訳では「バイエン」なのに、新訳では原著通り「コペチ Kopeć」さんです。

さらに一例をあげるとー

「動く歩道はきゆうにスピードをあげて、たちまちぼくらは工場についた」(内田訳)に対して、

「自分の左足を右足にまきつけ、握った両手を頭の上に高く上げると、僕たちみんなの先頭に立って、くるくる回りながら歩きはじめた。そのおかげで、動く歩道はぐんぐんスピードを上げて、僕たちは工場にあつという間にとうちやくした」(小椋訳)

と、より原著に忠実で、情景が目には浮かぶようです。

他にも、クレクス先生が背中の中のポケットの中にあるムクドリに気づかず、椅子にかけようとした時、ムクドリ・マテウシが叫びます。

原文の「Aga, ak!」(←省略のない元の文は「Uwaga, tak (jestem)」)「注意！(私)いるよ」が、

「ますよ、ドリ！」(小椋)／「ドリ、すれなく！」(内田)と訳され、単語の語尾だけを発音するムクドリの言葉

の和訳表現にも、できるだけ原作者の意図を再現しようとする工夫やご苦労が垣間見えます。

著者名も「ブジェフファ Brzechwa」と原文の発音に忠実で、現代の口語表現で統一され読者に親しみやすい丁寧な工夫が随所に見られる新訳によって、クレクス先生の世界が余すことなく伝わってきます。

ウクライナ生まれの著者ブジェフファが本書を書いたのは、第二次世界大戦中の壊滅的な打撃を受けたワルシャワで、このように、子どもたちの希望と想像を掻き立て、温かい眼差しを向けていたことには驚きの念を禁じえません。

同時に、それが2023年現在のロシアによるウクライナ侵攻下の状況と重なることや、物語の最後の悪意に満ちた人造人間による破壊と最近のAIの進化などに対する危険性の指摘などにも不思議な一致を感じ、あの状況下でも子どもたちに夢を与えることを考えた著者の気持ちに思いを馳せました。

小椋さんがあとがきで、落ちこぼれだった生徒たちがクレクス先生の学校で楽しく学ぶことによって生き生きと変わっていく様子に触れ、今日の日本の教育現場にも、それぞれの子供に温かい眼差しを向けたブジェフファの思いが大切、と指摘していることにも深い共感を覚えました。

旧訳の記憶

今回の福井さんの挿絵は優しい絵ですね。

原著の挿絵を描いたポーランドの有名な画家、ヤン・マルチン・シャンツェル Jan Marcin Szancer の描いた世界がこの本の魅力とともに記憶の中にあります。初訳の内田莉莎子さんの叙情ある一種の気品を感じる文体が、シャンツェルの描く夢の世界と相まって優雅な東欧の雰囲気と一緒に子供心に残っています。機会がありましたら、シャンツェルが描くクレクス先生の学校 Akademia Pana Kleksa の世界もご覧になってみてください。

本書は、ブラウザで読むストリーミング形式配信のデジタルブックです。当初は表示サイズによっては内容が先に見えて違和感を覚えたことがありますが、サイズを固定した後は内容に集中することができました。またアクセス機器が三台まで登録できて、ご家族との共有にも便利です。(住谷秀保、茨城大学工学部元教員)

POLE no.109 (May 2023)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: 35 th Anniversary Concert on 06/06/2023	1
New Members' Messages: Admired violinist Henryk Wieniawski (W. Tokuda) / Thinking about Poland (A. Suzuki) / My Dream "Heroic Polonaise" (K. Nakajima)	2
(Book Review) "Chopin - Prince of the Romantics" by Adam Zamoyski, translated by N. Onishi et al. (H. Miura)	3
Report: Video screening of the Polish films: "Eroica" by Andrzej Munk on 20/02/2023 & "Imagine" by Andrzej Jakimowski on 13/03/2023 (M. Sonobe) / New film "EO" by Jerzy Skolimowski	4
Report: Special Lectures - The Legacy of Bronisław Pilsudski on 04/03/2023 / Special Exhibition on B. Pilsudski in London "Nishipa - Among the Ainu" (K. Yoshida) / French Translation: "Penriuk et sa douleur. Ossements aïnous retenus prisonniers" by Yoshimi Dobashi, Presses de l'Université du Québec, 2023	5
In memory of Ms. Monika Szychulska-Tsuda / (Book Review) " Natsume Soseki, Haiku z lat 1889-1895, tłum. Monika Tsuda i Terumichi Tsuda, Poznań 2022 (T. Iguchi, A. Żuławska-Umeda)	6
NNW International Film Festival in Gdynia 2022 (Y. Asano)	9
(Book Review) Makoto Koshino's Poetry Collection "Standing on a Hill" (M. Sugawara) / "Polandia - In the Last Summer" by Masahiro Kudo (M. Seto) / For the 30th Anniversary of Theater Kino (Y. Nakajima)	10
Call for the 12 th reading session "Afternoon Poesia"	12
(Book Review) "Dialogue with a Ukrainian Youth Soldier" by Yoshimi Dobashi (M. Naganawa)	13
(Book Review) "Akademia Pana Kleksa" by Jan Brzechwa, translated by H. Ogura (H. Sumiya)	14